

京都南禅寺界隈の庭園における 山の眺望に関する研究

水谷 壮志¹・出村 嘉史²・川崎 雅史²・樋口 忠彦²

¹学生員 京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻（〒605-8501京都市左京区吉田本町, E-mail:mztntks@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp）

²正会員 工博 京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻（〒605-8501京都市左京区吉田本町, E-mail:demu@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp）

山の眺望は、日本の都市景観がもつ特徴の一つとされ、古来より日本では、外部の眺望をとり入れた庭園が数多く存在してきた。本研究では、特に京都の庭園に着目し、そこにおける山の眺望景観の特性を説明するための指標を提示することを目的とした。その結果、対象地域の庭園を、今回用いた4つの指標によって、ある程度明確に分類することができた。

キーワード：京都, 庭園, 山の眺望, 可視領域

1. 背景

(1)はじめに

山の眺望は、日本の都市景観がもつ特徴の一つとされている。事実、古来より日本では、外部の眺望をとり入れた庭園が数多く存在してきた。本研究では、特に京都の庭園に着目し、そこにおける山の眺望景観の特性を説明するために、有効な指標を提示することを目的とする。

(2)既往研究

庭園からの山の眺望景観に関する研究はこれまで多岐にわたり存在している。定性的研究としては、造園の観点から庭園の風景を分析した重森らの研究がある¹⁾。一方、定量的研究としては、山の風景がもつ視覚的構造（視角や不可視深度など）を分析し、考察した樋口の研究²⁾や、視点位置と山の透視形態との関係を考察した斉藤の研究などがある³⁾。

しかし、これらの既往研究では、庭園と山との空間的・地理的な関係が、風景にどのような影響を及ぼすのかについて、具体的に言及されていない。視点場（庭園）と視対象（山）の、視空間（地形）における位置関係は、風景の工学的理解において必要不可欠な項目であると考えられる。

(3)研究方針

そこで本研究では、庭園からの山の眺望景観を、「庭

園立地と地形との関わり方」を、次の2点に着目して、庭園における風景にどのような影響を及ぼしているのかを分析、考察する

- ・山と庭園との地形上の位置関係
- ・庭園内および、庭園周辺における微地形

2. 研究内容

(1)具体的研究手法

具体的な研究手法としては、まず初めに、写真・文献・現地調査等を参考にして、庭園における山の風景が、実際にどのように捉えられているのかを確認する。

続いて、庭園と山との空間的・地理的な関係を、次の仮定に基づいて分析する。すなわち、京都の山の風景は「対象として見る(look)か環境として見る(see)か」のいずれかに分類され、それらは山の風景の「平面性⇔連続性」および「視界に占める割合」によって大きく左右される、というものである。

これを踏まえ、次の4つの指標を設定する。

- ①眺められている山の水平視角範囲
- ②視点から庭園境界部までの可視距離
- ③庭園と山との間の不可視距離
- ④山側の可視領域の分布の様子

①の指標は、山の風景の「視界に占める割合」を表す。
②～④の指標は、庭園から山までのそれぞれの風景の、

「平面性⇔連続性」を表す。

続いて、これらの分析より、庭園周辺および庭園から山までの地形的特徴について、庭園周辺の微地形が山の眺望に及ぼす影響を分析する。なお、分析手段としてGISおよびCADを用いる。

最後に、これらの分析結果から、庭園からの山の眺め方を考察し、幾つかのパターンに分類し、各指標の有効性を検証する。

(2) 研究対象地

研究対象地としては、京都の中でも数多くの庭園が立地している、南禅寺界隈の庭園群について研究を行う。南禅寺は京都の東部、東山連峰の麓に位置しており、周囲は吉田山、瑞龍山、南禅寺山、などの山に囲まれている。この地域は、古くは臨済宗の大本山・南禅寺の塔頭庭園が林立しており、明治期には、造園家・小川治兵衛によって、琵琶湖疏水の流れを利用した新たな意匠の庭園が数多く造られた。そして、これらの庭園の殆どから、東山の眺望を得ることができると言われる。

研究対象とする庭園としては、この地域の代表的庭園12庭園を採用した(図-1)。本論では、そのうちの3庭園である、何有荘庭園・無隣庵庭園・碧雲荘庭園の分析を示す。

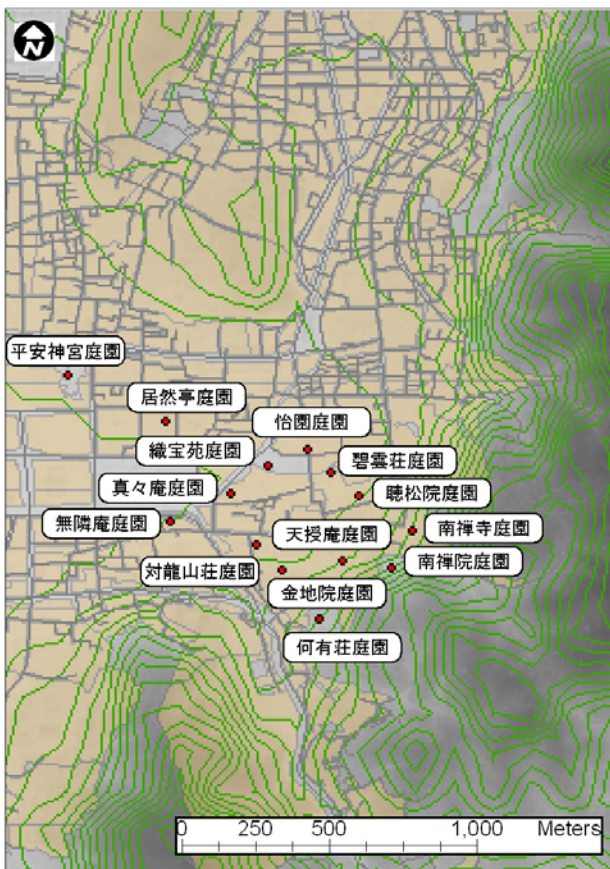


図-1 研究対象地である南禅寺界隈と庭園群

3. 各庭園の分析および考察

(1) 何有荘庭園

元南禅寺塔頭であった土地に造られた庭園で、完成は明治二十八年(1895年)。作者は、明治・大正期の代表的造園家、小川治兵衛(植治)である。1961年発行、京都記念会『京都の庭園』(便利堂)によると、この土地は「南禅寺山を負い、(琵琶湖)疏水東山分水を採り入れて西北の眺望展けた勝景を占める傾斜地を有している。」という。

庭園は上下二段で構成されており、上段部の建物・草堂からは、京都市街や東山連峰が広く見渡せる。しかし、庭園の中心は下段部の池泉周辺であると思われるので、今回は、眺望の長けた上段部を例外として位置づけた。そして、下段部の池庭周辺に代表的視点位置を設置し、南禅寺山方向の眺望を分析した。

この視点からの可視領域を図-1に示す。図より、可視領域は南禅寺山の山腹に集中していることが伺える。また、水平視角は約60度であり、山の風景が、視野内に全て捉えられると考えられる⁴⁾。

視点から庭園境界部の可視領域までは160mあるが、庭園と山との可視領域に区別は見られない。

庭園周辺の地形(図-2)を見てみると、視対象となっている南禅寺山の周囲には粟田山、瑞龍山などが連なっており、庭園の周囲は地形的に囲繞されていることが分かる。また、山のピークを眺める視線上の断面図(図-3)を見ると、庭園下段部は、ほぼ平面的であることが伺える。

庭園は南禅寺山に内包されており、庭園の一部は山の傾斜を巧みに利用して、琵琶湖疎水の流れを下段の池庭へと落としている。これは、南禅寺山が鑑賞対象ではなく、庭園意匠の一部、環境の一部として視界の内に捉えられていることを現していると考えられる。



写真-1 何有荘庭園、代表的視点からの南禅寺山の眺望

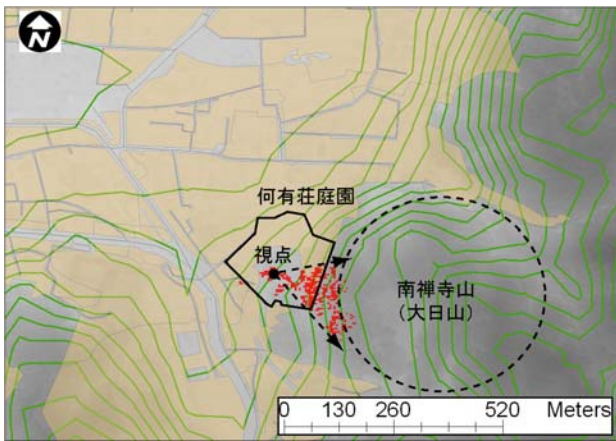


図-2 何有荘庭園からの可視領域 (赤色表示)

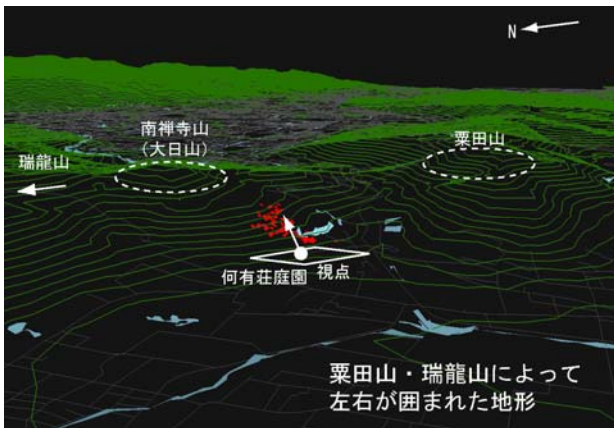


図-3 何有荘庭園周辺の地形 (等高線は緑色表示)

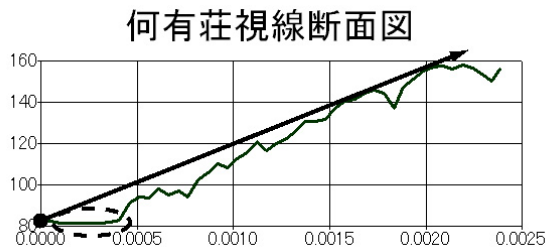


図-4 何有荘からの主な視線による視線断面図
(水平方向[$\times 10^5$ m], 垂直方向[m])

(2) 無隣庵庭園

明治二十八年頃に造られた庭園で、施主は政治家の山県有朋、作庭者は小川治兵衛である。庭園は東西上下二段の流れによって構成され、東方には、瑞龍山（獨秀峰）周辺の東山連峰を眺めることができる。これにより、「東山を借景としてとり入れ狭い敷地を頗る広大に見せる工夫」がなされているという。代表的視点位置として、西部の建物縁側部を採用した。

この視点からの可視領域を図-5に示す。また、山側の可視領域は大きく2箇所に分散しており、ある程度奥行

き感をもって眺められている。また、水平視角範囲は約10度であり、山の眺望を意図的に限定している。

庭園周辺の可視領域から山の可視領域までの不可視距離は、約720mである。視点から庭園境界部までの可視距離が約60mであることを考えると、大変長い距離であることが分かる。

この庭園から山までの間の地形は、南方を除いてある程度開けている（図-6）。そして、無隣庵庭園周辺の地形を見てみると（図-7）、視線方向に沿ってなだらかに登り勾配となっている。庭園はこの地形を生かし、山までの風景の連続性を生み出していると考えられる。これより、無隣庵庭園は、庭園内部の操作によって、わずかな範囲の山を意図的に見せていることが、地形との対比からも分析される。



写真-2 無隣庵庭園，代表的視点からの東山の眺望

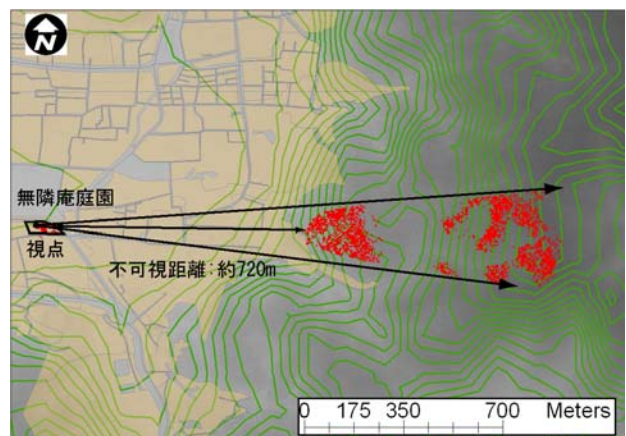


図-5 無隣庵庭園からの可視領域 (赤色表示)

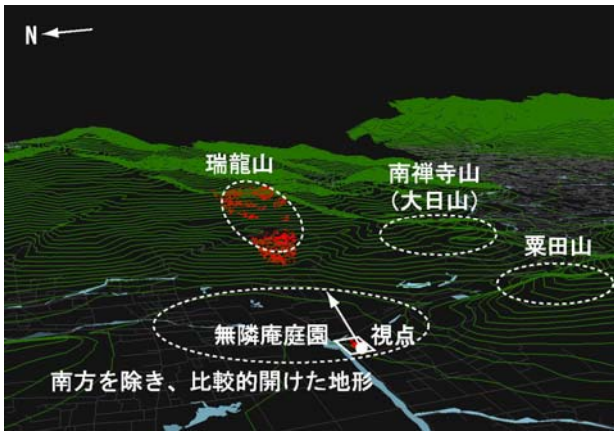


図-6 無隣庵庭園周辺の地形（等高線は緑色表示）



写真-3 碧雲荘庭園，代表的視点からの東山の眺望

無隣庵庭園視線断面図

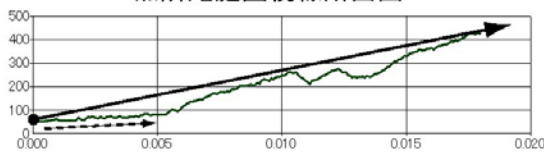


図-7 無隣庵庭園からの主な視線による視線断面図
（水平方向[$\times 10^5$ m], 垂直方向[m]）

(4) 碧雲荘庭園

昭和三年（1928年）に完成した庭園で，作庭者は財界人の野村得庵，施工者は小川治兵衛（植治）である。庭園は，池泉を中心に，流れ，露地，芝生広場などを配している。

この庭園内からは，東部に隣接する禅林寺境内，さらには背後の東山が，広範囲に眺められる。今回は代表的視点位置として，池泉の西端部分からの東方の眺望を分析する。

初めに，この視点からの可視領域を図-8に示す。図より，広い庭園内から，東山一帯を広く捉えていることが分かる。水平視角は約100度であり，東山を一度に視界に入れることは不可能であることが考えられる¹⁴。

この碧雲荘庭園と東山との間には禅林寺境内が存在する。碧雲荘庭園内から禅林寺の境内が眺められていることが，可視領域からも確認される。碧雲荘庭園と，この禅林寺の背後にある東山の一部との最短不可視距離は100m程度であり，庭園から，東山がほぼ連続して眺められていることが分かる。また，視点位置から最も遠い庭園内可視領域までは，約170mあり，庭園の風景が非常に大きく捉えられていることが分かる。

庭園周辺の大地形を見ると，東山に囲繞されていることが分かる（図-9）。また，庭園とその周囲の地形を主な視線断面において示すと，図-10の様になり，庭園およびその周辺の地形は，ほぼ平坦であることが分かる。

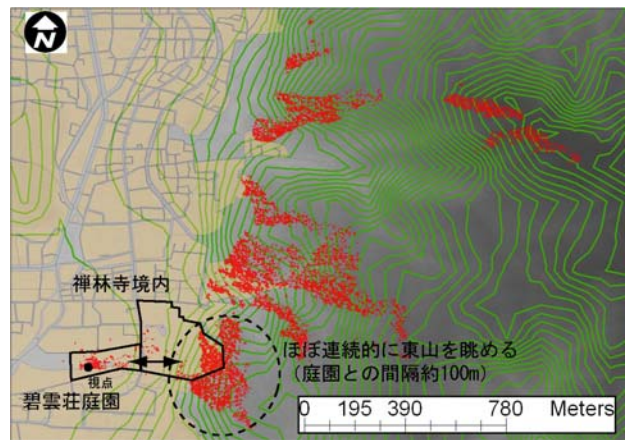


図-8 碧雲荘庭園からの可視領域（赤色表示）

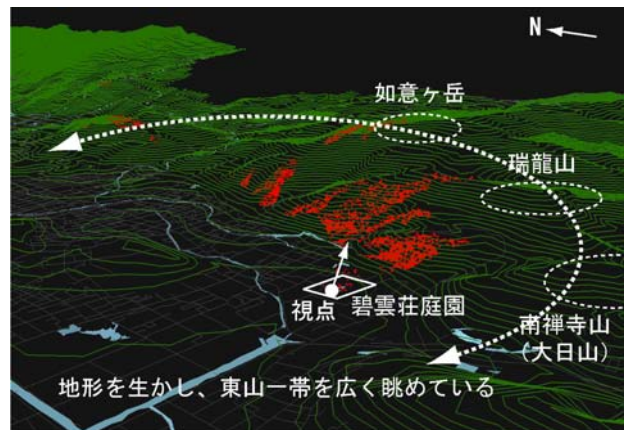


図-9 碧雲荘庭園周辺の地形（等高線は緑色表示）

碧雲荘庭園視線断面図

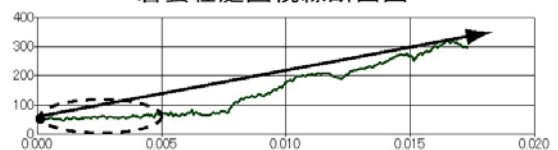


図-10 碧雲荘庭園からの主な視線による視線断面図
（水平方向[$\times 10^5$ m], 垂直方向[m]）

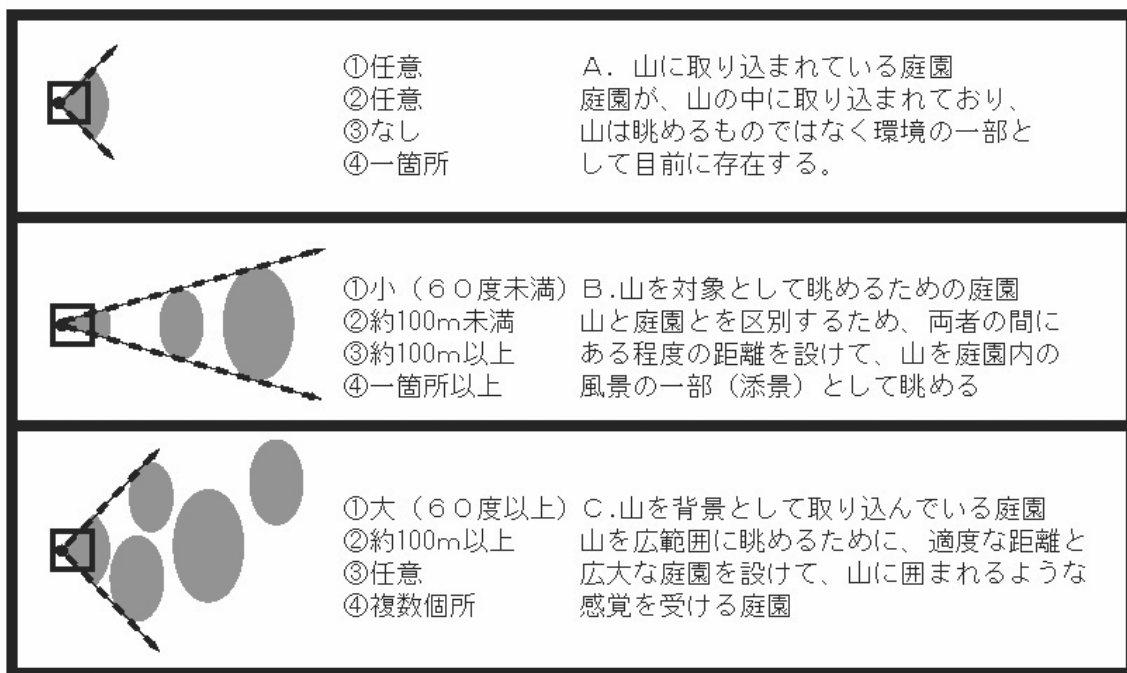


図-11 庭園の類型化

4. 考察

(1)分析の結果

以上より、各庭園の分析結果をまとめると、表-1のようになった。

庭園名	①	②	③	④
何有荘庭園	約60度	約160m	—	一箇所に集中
無隣庵庭園	約10度	約60m	約720m	二箇所に分散
碧雲荘庭園	約100度	約170m	約100m	複数個所に分散

指標) ①眺められている山の水平視角範囲
②視点から庭園境界までの可視距離
③庭園と山との間の不可視距離
④山側の可視領域の分布の様子

表-1 分析結果

(2)庭園の類型化

以上の分析結果から、地理的・空間的観点による庭園の類型化を行うと、次のようになった(図-11)。

A. 山に取り込まれている庭園

庭園が、山の中に取り込まれており、山は眺めるものではなく環境の一部として目前に存在するような庭園。

B. 山を対象として眺めるための庭園

山と庭園とを区別するため、両者の間にある程度の距離を設けて、山を庭園内の風景の一部（添景）として眺めるような庭園

C. 山を背景として取り込んでいる庭園

山を広範囲に眺めるために、適度な距離と広大な庭園を設けて、山に囲まれているような感覚を受ける庭園

5. 結果

前章の考察の結果、対象地域の庭園を、今回用いた4つの指標によって、ある程度明確に分類することができた。しかし、今回の指標だけでは、庭園からの山の風景を分類するには未だ不十分であることが分かった。例えば、「A. 山に取り込まれている庭園」などは、庭園の大きさによっては、開放的な雰囲気をもつ場合もある。

今後の研究として、庭園内の意匠と外部（周囲の微地形や視対象である山）との関係をさらに詳細に分析していきたい。

参考文献

- 1) 重森三玲, 重森完途『日本庭園史体系』社会思想社, 1974
- 2) 樋口忠彦『景観の構造』技報堂, 1975
—pp40-41
- 3) 斉藤潮ら「都市縁辺部における地形透視像とその固有視点について」
- 4) 視野60度コーン説「人間の視角は60度」一篠原修『景観用語事典』1998, 彰国社, pp. 43